

令和7年度 函館市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和7年11月26日(水) 13時00分～14時30分
- 2 場 所 函館市役所8階 大会議室
- 3 出席者 **【構成員】**
大泉市長，藤井教育長，木村委員，小葉松委員，國谷委員，井口委員
【事務局】
土生生涯学習部長，堤学校教育部長，上野学校教育部次長，
鈴木管理課長，中山教育指導課長，中田教育政策課長
【発表者】
中島小学校 目黒校長，桔梗中学校 池田校長
深堀中学校 京谷地域コーディネーター

4 欠席者 なし

5 傍聴者 傍聴者4名，報道関係者1名

6 次 第 1 開会

2 協議事項

(1) 函館への愛着や誇りを育むふるさと・キャリア教育

ア 説明「函館市におけるふるさと・キャリア教育について」

イ 事例発表「学校における取組について」

(中島小学校，桔梗中学校，深堀中学校)

ウ 意見交換

(2) その他

3 閉会

1 開会

■上野学校教育部次長

それでは定刻となりましたので，ただいまから，令和7年度函館市総合教育会議を開催いたします。

私は，議事に入るまでの進行役を務めさせていただきます教育委員会学校教育部次長の上野でございます。よろしくお願いいたします。

はじめに，会議の主宰者であります市長からご挨拶をいただきます。

大泉市長，どうぞよろしくお願いいたします。

■大泉市長

本日はご多忙のところ，令和7年度函館市総合教育会議にお集まりいただき，誠にありがとうございます。

教育委員の皆様におかれましては，日頃から本市の教育行政の推進にご尽力を賜り，改めてお礼を申し上げたいと思います。

総合教育会議は，「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づいて，教育委員会と市長部局が方向性を共有し，連携して効果的に教育施策を推進していくことを目的として，毎年度開催しているものであります。

本日の会議では、「函館への愛着や誇りを育むふるさと・キャリア教育」をテーマといたしまして、本市のこれからの教育のあり方について、意見交換をさせていただきたいと考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

本市では、令和6年に生まれた子どもの数が、千人を下回りまして過去最低を更新しました。加えて、地域社会におけるつながりや支え合いが、どんどん薄れていく実態にあります。

教育においても、多様な人々と主体的に協働し、互いに支え合う力を育むとともに、函館への愛着や誇りを強くもち、まちの魅力向上に寄与していく人材の育成が求められているところでもあります。

こうした状況を踏まえ、本日は、各学校における「ふるさと・キャリア教育」の取組について、ご報告をいただく予定であります。

ふるさとのよさや地域の職場の現状・魅力を小・中学生の段階から学ぶことは、一度函館を離れても、またふるさとに戻って、この地域を支えていこうとする心を育むものになると考えております。

本日は、限られた時間の中ではございますが、委員の皆様と活発な意見交換をさせていただければ幸いです。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

■上野学校教育部長

ありがとうございました。それでは、協議事項に入らせていただきます。

「函館市総合教育会議の運営に関する要綱」の規定に基づきまして、この後の会議の進行については、市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしくお願いいたします。

■大泉市長

それでは、次第に沿って議事を進めます。

はじめに、協議事項（1）説明として「函館市におけるふるさと・キャリア教育について」、教育委員会事務局から説明をお願いします。

■堤学校教育部長

教育委員会学校教育部長の堤でございます。

私から「函館市におけるふるさと・キャリア教育」についてご説明を申し上げます。

前方のスライドまたはお手元の資料をご覧ください。

本市におけるふるさと・キャリア教育につきましては、令和5年に改訂した「函館市教育振興基本計画」において、「函館への愛着や誇りと未来へ飛躍する力の育成」を目標として、子ども一人ひとりが、函館の魅力を感じ、関わりを深め、愛着や誇りをもつとともに、未来に向かって新たな価値を生み出す資質・能力を育むことをめざしているところです。

また、市長公約にも「ふるさとの職場を知る教育の実施」が掲げられており、職場見学や職場体験などを通して、地元企業の魅力を小・中学生のうちから学ぶことで、将来の選択肢を増やし、一旦地元を離れてもやがて戻ってくる人材サイクルの構築もめざしているところです。

そうした中、各学校におきましては、ふるさと・キャリア教育の充実に向けて、様々な取組を行っているところですが、この後、中島小学校、桔梗中学校からと深堀中学校地域コーディネーターの方から、それぞれの学校や地域の特色を活かした取組の説明がございますので、私の方からは、函館市全体の主な取組について、何点か説明したいと思います。

まず取組の1つめ、「地域資源を活用した教育活動の推進」といたしましては、各小学校では、地域資源を教材として、自分が住んでいる地域の街探検や、宿泊研修などにおける西部地区の散策など、身近な地域や函館の歴史、文化、自然に直接触れる体験活動などを行っております。

また、小学校3・4年生については、本市で作成しております「社会科副読本わたしたち

の函館」を活用し、自分たちが暮らす函館の様子について学習しているほか、小学校3年生では、「縄文に触れる学習」として、縄文文化交流センターなどを見学し、体験活動なども行っているところです。

市立函館高校でも、学校設定科目「函館学」において、地域で活躍する人材を活用した函館学基調講演会や函館学講座などを行うほか、「地域探究学習」において、福祉・教育・子育てなど函館地域で行われる講座に生徒が参加するなど、函館を知る学習に力を入れているところです。

取組の2つめ、「地域に貢献する教育活動の推進」では、社会に参画する気持ちを育むため、地域清掃活動や地域のイベントでの運営の手伝い、町会と協力した防犯パトロール、地域住民や企業と連携した防災学習など、地域課題の解決に取り組む学習を地域コーディネーターと連携を図るなどしながら行っております。

取組の3つめ、「キャリア教育の推進」では、「キャリア・パスポート」の活用や職場見学・職場体験、また様々な職業人を招いた講演会なども行っているところです。

今、お話ししました「キャリア・パスポート」ですが、「キャリア・パスポート」とは、小学校から高校までの児童生徒が、自身の学習状況やキャリア形成に関する活動を記録・保管するポートフォリオのことです。

これは、文部科学省が提示する学習指導要領に基づき、2020年度から導入された取組となります。

この「キャリア・パスポート」を活用することによって、児童生徒が自身の学びや活動を振り返り、目標設定や将来の生き方を考えることで、主体的に学ぶ力を育み、自己実現につながることをめざすとともに、小学校から高校まで一貫して記録を引き継ぐことで、児童生徒の成長を長期的に支援し、教師もその記録を基に対話的に関わり、指導に役立てております。

また、教科の学習だけでなく、学校行事、部活動、地域活動、家庭での取組など、学校内外の多様な経験を記録することで、学びと自己の将来とのつながりを意識させております。

こうした各学校での取組に加え、教育委員会では、中学生が本市の歴史について理解を深め、自分たちの住むまちへの愛着や誇りをより一層もってもらいたいと考え、函館で活躍した人物に焦点をあてた「函館郷土の歴史人物読本」を作成することといたしました。

この歴史人物読本は、江戸時代から平成にかけて、教育や医学、産業などの様々な分野において、本市の発展に貢献した歴史人物約300人の中から30人を選定し、函館市のまちづくりの歩みや時間軸の流れなどについて、大まかに理解できるように、中学校社会科研究会の教諭や学芸員などの力を借りながら、現在執筆作業に入っているところです。

今後、編集作業を行ったうえで、年度内に電子版として発行し、来年度、各中学校の社会科の授業や朝学習などにおいて、1人1台端末上で活用する予定としております。

今後、ふるさと・キャリア教育の充実をより一層図っていくためには、学校と教育委員会だけの取組だけではなく、市長部局との連携も重要になってくると考えており、職場体験の受け入れにご協力いただける企業等について、中学生が地元の企業を知り、自らの進路を考える選択肢を増やすことができるよう、関係部局を通して、市内企業などへ協力依頼をしたところです。

市長部局の取組といたしまして、経済部では、市長公約や人口減少対策事業として将来的なUターン就職等による地元就職の促進を図るため、高校生を対象とした「学び」と「しごと」のつながりを体験する「しごとフェスタ」を実施するほか、地元の状況や地元企業に対する理解を高める「地域課題と企業を知るプログラム」を実施しております。

「しごとフェスタ」につきましては、今年度は9月に開催され、道南の高校生約850人が参加する中、市内企業などが設置した20ブースにおいて、仕事紹介や仕事体験を行い、地元企業について理解を深める機会となっております。

また、保健福祉部では、中学生・高校生・大学生を対象に、地域との向き合い方や地域共

生の必要性について考える「地域共生ワークショップ」を実施しております。

今年度は10月に市内在住・在学の生徒・学生約50人が参加し、函館市の地域福祉の現状や地域での実践活動などについての講義を受講するほか、多様な人々が地域でともに暮らすことにより生じる課題や解決方法について、グループワークを行っております。

市長部局においても、このように中学生・高校生が地元を知り、地元について考える取組がありますことから、教育委員会といたしましては、これまでの取組の充実に加え、市長部局との協力体制を強化しながら、本市のふるさと・キャリア教育のさらなる充実を努めてまいりたいと考えております。

以上で私からの説明を終わります。

■大泉市長

ありがとうございます。

ただいま事務局から説明がありましたが、のちほど意見交換で皆様からのご意見を伺いたいと思います。

続いて、事例発表に移ります。「学校における取組について」、中島小学校、桔梗中学校、深堀中学校からそれぞれご説明をお願いいたします。よろしく申し上げます。

■中島小学校目黒校長

函館市立中島小学校長の目黒と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、「函館への愛着や誇りを育むふるさと・キャリア教育」についての本校における取組を説明させていただきます。

本日は、実践例を中心にご紹介させていただきたいと思います。

まず、本校の概要についてです。

本校は、昭和8年に函館市中島尋常小学校として開校し、在籍児童が1,783名と記録されております。現在は、開校92年を迎え、全8学級、児童数が124名となっております。

学校教育目標を中島小の頭文字をとりまして、「な：仲の良い子」、「か：考える子」、「じ：自信をもつ子」、「ま：負けない子」と設定し、お示ししておりますような姿を教職員、保護者、地域の皆さんで共有し、日々の教育活動にあたっているところでございます。

特に今年度は、中ほどの「考える子」と「自信をもつ子」を重点として、指導にあたっているところでございます。

次に、本校の特色ある教育課程について、キャリア教育との関わりからご紹介をさせていただきます。

本校では、学校教育目標の実現に向け、各教科、道徳教育、特別活動、総合的な学習の時間等において、キャリア教育を充実させております。

本校のキャリア教育では、人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力、自己理解・自己管理能力、そしてキャリアプランニング能力の育成をめざしております。特に、人との関わり、物との関わり、事との関わりを重視しているところでございます。

本校付近に立地する「中島廉売」を学習素材として、6年間、人、物、事との関わりを深めております。

このスライドは中島廉売を6年間、学習素材として取り扱う系統図になっております。

1年生から3年生の低学年では、「人や物」との出会いを中心としたサイクル、4年生から6年生の高学年においては、「物や事」との出会いを中心としたサイクルとして捉えております。

本日は、1年生、3年生、6年生の実践をご紹介させていただきます。

まずは、実践事例① 第1学年 生活科「あそびにいこうよ!」です。

本実践では、地域を探検する活動を通し、自分たちの生活が様々な人や場所と関わっていることに気づき、親しみや関心をもつことをねらいとしています。

本校では、中島町で暮らす地域の方々や中島廉売で働く人々との関わりを深める活動を設

定しております。

ご覧いただいている写真は、中島廉売へ行っているところの写真です。子どもたちは、中島廉売で働く人々の優しさを感じたり、地域の施設に親しみを感じることができました。

本校の6年間の学習のスタートとなる中島廉売との初めての出会いであることから、中島廉売には、優しい人たちがたくさんいるという実感をもつことができるよう、取組を進めております。

次に、実践事例② 第3学年 総合的な学習の時間「中島町PR大作戦！」です。

本実践では、町づくりや地域活性化のために取り組んでいる方々の活動を知ること、地域のよさが、様々な人たちの努力や工夫によって支えられていることに気づき、関心や意欲をもつことをねらいとしております。

本校では、北海道教育大学函館校の学生の協力を得て、中島廉売との関わりを深める活動を設定しています。

左側の一番下の写真は、大学生が本校に来て授業をしていただいている写真です。

子どもたちは、中島廉売のよさを実感し、地域に親しみや関心を感じることができました。

本校では、地域活性化に取り組んでいる大学生の取組に憧れ、中島廉売は、素敵なおとななのでたくさんの人たちに来てほしいという願いをもつことができるよう、取組を進めております。

次に、実践事例③ 第6学年 総合的な学習の時間「魅力いっぱい！中島町」です。

本実践では、地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人たちの取組を知ること、その魅力や必要性に気づき、自身も未来にその担い手として活躍していくための意欲や希望をもつことをねらいとしています。

本校では、中島町会長などの協力を得て、地域との関わりを深める活動を設定しております。

この写真は、町会長が学校へ来て、6年生を対象に授業していただいている様子です。

本実践では、「暮らしやすい私たちの地域」をテーマにスライドとしてまとめ、函館市役所の担当者へ発表できないか、子どもたちと話し合っているところです。

最後に、実践事例④ 第6学年 道徳科「町の偉人 中島三郎の助」です。

本実践では、地域の偉人である「中島三郎の助」の生き方を知ること、地域に受け継がれている伝統や文化をさらに発展させたい、という希望や誇りをもつことをねらいとしております。

このスライドは、本校独自の道徳教材の写真になります。

「自分の考えを信じ、勉学に励む武士 中島三郎の助」を活用し、ねらいの達成を図っております。こちらは本校の独自教材で、本校の教育課程に位置付けて、毎年、第6学年で取り扱うこととしております。

本実践を通じ、子どもたちは中島町の歴史や町に息づく偉人の思いや願いを、自身の生き方に重ね、地域の発展や継承を自分事として考えることができました。今年度、本実践の総括として、学習発表会において発表いたしました。

本校では、このほかにも様々な実践としてキャリア教育を推進し、子どもたちが地域を思い、地域の発展を願い、参画していこうとする態度の育成に努めております。

こうした学びの成果は、「函館市キャリア・パスポート」として6年間取りまとめ、中学校進学時に引き継いでいるところでございます。

これまでの取組の成果といたしましては、児童が中島廉売と繰り返し関わることで、地域に愛着をもつことができるようになりました。また、児童が憧れるような人との出会いを通じ、自身の生き方や働き方には、地域との関わりを欠かすことはできないという、思いの基礎を整えることができました。

課題といたしましては、これらの実践を今後も継続的に持続可能な取組となるよう、改め

て効果的に教育課程へ位置付ける必要があること、そして子どもたちがさらに魅力ある地域の方々と出会うことができるよう、人材バンクを整備する必要があることが挙げられております。

さらに、今後はこれらの取組をブラッシュアップさせ、子どもたちのキャリアプランニング能力などの育成に努めてまいります。

今後のブラッシュアップにつきましては、キーワードとして「防災教育」、「防災拠点」や「人口減少」などの要素を取り入れる可能性を現在検討しているところです。

以上で、本校の取組の紹介を終了いたします。ありがとうございました。

■桔梗中学校池田校長

皆さん、こんにちは。桔梗中学校の池田と申します。本日はよろしく願いいたします。

今日はパソコン操作担当として、本校の主幹教諭の外崎も同行しております。よろしく願いいたします。

それでは、「函館への愛着や誇りを育むふるさと・キャリア教育」についての本校における取組を説明させていただきます。

スライド表紙の写真は、春に花かいどうボランティアで、日曜日に生徒たちが参加して、花を植えたときの写真です。赤ジャージは3年生です。とてもいい表情をしていると思いませんか。秋には花を抜いて撤去する作業がありました。

次のスライドは、2020年から2025年の日本全国の市区町村別の魅力度ランキングの表です。

函館市は、2024、2025年と2年連続のトップです。表にはありませんが2018、2019年もトップでした。2020年から2025年までの6年間、札幌市とともに常にトップ3に入るほど、魅力度が高いまちとして評価されています。

次のスライドに移ります。大泉市長の公約の中に「ふるさとの職場を知る教育の実施」、一旦地元を離れてもやがて戻って来る人材サイクルの構築とあります。

本校ではその実現に向けて、ふるさと教育・キャリア教育に取り組んでいます。

小・中学生のうちからふるさと教育を行い、函館の魅力やよさを知ることができれば、函館以外の地域へ出て行ってしまうことは減るだろう、また、一旦他の地域へ出て行っても、函館のよさを知っていたり、職場体験等をして企業の魅力も知っていたりすると、函館にまた戻って来る可能性も増えるだろう、という考えで行っています。

本校の総合的な学習の時間では、「地域学習」つまりふるさと教育と「生き方学習」つまりキャリア教育の2本立てで学習しています。

1学年の地域学習では、函館の課題やよさを知る学習、生き方学習では、職業調べと職場体験に取り組んでいます。それぞれのカリキュラムの中身は、このスライドのようになっています。

次のスライドをご覧ください。1学年のキャリア教育では、育てたい基礎的・汎用的能力の4つの中の1つであるキャリアプランニング能力として、「様々な職業の社会的意義や勤労の意義、働く人の思いを理解する」を目標にしています。

1学年のふるさと教育では、「函館のよさを知る」をテーマにして、ふるさと函館のよさを他の地域と比較して学び、函館の特徴を把握して、発信したり、伝えたりすることができることをめざしています。

職場体験学習前の地域学習として、次の3つを行いました。

1つめは、公立はこだて未来大学の准教授にお越しいただき、「社会調査の技法で読み解く「函館」のイメージ」と題して、講義をしていただきました。事前に生徒へアンケートを行い、大学生と比較したデータを作成し、生徒からは次のような感想がありました。

「函館のよさと課題」では、中学生と大学生の考えがわかり、課題点では、大学生は交通に関することが書いてあったのが、大学生ならではの気になる点だと思った。よさは似たような内容が書いてあったのでだいたい同じだと思った、という内容です。

2つめは、函館国際水産・海洋都市推進機構の事務局長から、SDGsの目標をもとに函館の漁業の実状から新しい取組として「函館マリカルチャープロジェクト」について、お話をいただきました。

生徒からの感想としまして、「函館はイカのまちだけどイカが捕れなくなっていて、それが海の課題だと思った。でも、前にキングサーモンは高級品だと教えられていたが、函館市で養殖を始めたので、そんなキングサーモンの魅力にひかれて、人口が増えるんじゃないかと思った。」という感想がありました。また、その様子については、ホームページにも取り上げていただきました。

3つめは、函館市教育委員会学校教育部保健給食課の方から「函館市の学校給食」について、歴史や食材、給食ができるまでのお話をいただきました。

生徒からの感想としまして、給食を作る際に、献立を考える、予算を考える、衛生管理など、食べる人のためにいろんな労力がかかっているんだな、と思った。特に、衛生管理の面では、丁寧な手の洗い方の工程、衣服の工夫などの様々な労力がかかっている、それを毎日していてすごいと思ったし、ありがたいなと思った、という内容でした。

この3つの地域学習を受けて、生徒たちが「Canva」というパソコンのソフトでプレゼンテーション資料を作成し、学級発表会を行い、代表を決めて学年発表会を行いました。

こちらのスライドをご覧ください。3人の生徒の作品を紹介します。

1人目は、「函館の海」と題して作品を作り、函館の海の特産品や函館マリカルチャープロジェクトを取り上げています。

課題としては、現在はイカが取れています。資料を作成したときはイカが不漁であったため、スルメイカなどの不漁、海面海水温度上昇による漁獲量の減少、漁業従事者の高齢化の3つを挙げています。

最後に、資料を作成する前は、この函館の危機をどう挽回するのかなと思っていましたが、マリカルチャープロジェクトがあり、主な課題がわかっている、大丈夫そうだなと思ったこと、社会科で学んだ少子高齢化や地球温暖化が、函館の漁業に影響しているのがよくわかったので、私はこれからは節水や節電、ごみの減量などに尽力して、漁業に少しでも貢献できたらいいなと思った、とまとめています。

2人目は、「函館の食」～函館の食べ物まとめ～と題して、函館の食について取り上げています。

初めに函館の街並みを、そして「函館だけの食」として、ラッキーピエロのハンバーグステーキやハセガワストアのやきとり弁当などを取り上げています。

函館の海産物について、漁獲量の減少という課題があるので、函館マリカルチャープロジェクトをこの生徒も取り上げています。

まとめとして、函館には函館にしかない食文化があり、またそれを守っていく必要がある。函館は海に囲まれていて、新鮮な海の幸に恵まれているが、スルメイカが捕れなくなって、キングサーモンと真昆布を養殖しようというプロジェクトの取組があり、改めて函館には誇れる食があることがわかった。またそれを守っていく人、作っていく人も大勢存在すると知った。これからは持続できるかが課題だと感じた、とまとめています。

3人目は「函館のよさと課題」について、コンパクトにまとめています。

よさとしては、海産物が豊か、歴史的建造物が多いの2つを、課題としては、人口減少と交通渋滞を挙げています。

この写真は、ブラックアウトのときにガソリンスタンドで給油するために、車が渋滞している実際の函館の写真です。

まとめとして、函館のよい点と課題点の両方が多くあることがわかったこと、これからは函館のよさを大切にしながら、課題を解決する工夫が自分たちは必要だと思ったとまとめています。以上3作品です。

事例発表のスライドに戻ります。

次に、生き方学習として職場体験を実施しました。企業を探すにあたり、函館市PTA連合会の元会長が本校の地域コーディネーターであり、いくつかご紹介いただきました。

さらに、函館市ホームページにある「はこだてっ子職場体験協力事業所」や「函館高専地域連携協力会」の会員企業へ学年の先生方が分担して連絡し、50社以上もの企業に協力していただきました。

その中で3社だけですが、生徒たちの様子を紹介いたします。

最初の企業は、目視検査にAIを使い、人工知能検査システムとして自動化・高速度化し、検査効率の向上を図っている企業です。AIを使ってキズを見つけるロボットやソフトを作っています。

2つめの企業は、地域のライフラインを支える設備工事会社です。水道・ガス・空調などの設備工事、建物の中で、人が快適に過ごせるための目には見えないけれど、大事な仕事をしています。

最後の企業は、海と地域に根差した企業で社会貢献もしている建設会社です。この企業からは、動画を提供していただきました。こども家庭庁の「こどもまんなか宣言」の趣旨に賛同し、子どもたちと一緒に色々な活動に取り組んでいる企業です。

こちらの動画は、テトラポットのミニチュアを作っている様子です。

スライドに戻ります。函館はGLAYのふるさとです。GLAYのメンバーには、桔梗中学校出身者がいます。今年の港まつり、ワッショイ函館のミュージックビデオにテルさんと一緒に本校の生徒たちも出演しました。また、去年はGLAY30周年ということで、私もテレビ局の取材を受けました。

最後に今後の取組ですが、本校はこれからも、教育目標と重点教育目標の達成をめざし、生徒真ん中の学校づくりをしていきます。函館市の未来社会の創り手として、新たな価値を生み出して、活躍できる生徒を育てていきます。

以上で、本校の取組の説明を終わります。ありがとうございました。

■深堀中学校京谷地域コーディネーター

函館市立深堀中学校地域コーディネーターをしております京谷と申します。

本日は、学校と地域が連携し取り組んでおります「函館への愛着や誇りを育むボランティア活動」について、ご報告させていただきます。

現在の小・中学生は、成長の過程でコロナ禍の影響を大きく受けた世代であり、本来できるはずの経験を積み重ねられず、また保護者もコロナ禍の制限がある生活が、当たり前となった状況での子育てを行っています。

その結果、タテ、ヨコ、ナナメのつながりの経験が乏しく、成長していく先のイメージももちにくい状況と考えられます。

一方、地域ではコロナ禍で制限した地域活動を再開、立て直すことに苦慮する様子もあり、それぞれが課題を抱えている状況にあります。

子どもたちが地域の方々と関わりながら、多世代での活動を重ねることで、子どもたちには、郷土愛、責任感、社会性が育ち、地域には、活力やつながりが生まれるなど、それぞれにとって、課題解決に近づいていると感じていますので、ご報告させていただきたいと思えます。

具体的な活動についてですが、今回このように貴重な機会をいただけましたので、様々な活動をお伝えしたく、3つの角度で活動を分けて資料をご用意いたしました。

1つめは、中学生は後輩を感じ、小学生は憧れや目標が見えるよう、「小・中学生のタテのつながり」を意識したもの。

2つめは、地域や地域にいる人を感じられるよう、学校教育に「地域の人から学ぶ」機会を設けたもの。

3つめは、地域を感じ、自己有用感の高まりにもつながる「地域の担い手として」の活動です。

本日は時間の関係上、中学生が活動の中心であります、1つめの「小・中学生タテのつながり」と3つめの「地域の担い手として」についてご報告させていただきます。

まず、「小・中学生タテのつながり」についての中学生のボランティア活動ですが、こちらのスライドは、中学生が小学生への学習サポートを行う活動をしています。

次は、小学校の運動会の運営ボランティアです。低学年のトイレ誘導なども担当いたしました。

こちらは、廃材での木工作品づくりの作業補助の様子、最後は防災大運動会での活動の様子です。

このように「小・中学生のタテのつながり」を意識した活動は、小学生にとっては、身近なロールモデルとして学ぶ機会になり、中学生にとっては、年下を支える経験から責任感が育ち、自己成長にもつながるものと感じています。

次からの「地域の人から学ぶ」という部分については、小学生の活動になりますので、本日は割愛させていただきますが、このように小学生のときから地域を身近に感じる経験を積み重ねることは、中学進学後の活動の土台となるものであり、郷土愛の育みにも大きくつながっているものと感じております。

次は3つめの「地域の担い手として」という活動のご報告になります。

スライドをご覧ください。こちらはクリーングリーン作戦で、地域の方と交流しながら清掃活動を行った様子です。

次のスライドは、町会の七夕まつりの運営ボランティアを行っている様子です。町会行事のマンネリ化を中学生の提案と工夫で、多世代が楽しめる活動にすることができました。

次のスライドの走らないミニ運動会ですが、中学生のサポートがあることで、新たに企画できた町会行事です。高齢者がとても楽しみにしている、人気の行事になっております。

次のほりほり市での活動、そして学童のお祭りについてですが、いずれも主催者の方から、中学生と一緒に活動することで、実施が継続できているという感謝の言葉をいただいております。

次の深駒町会夏まつりですが、中学生の参加は今年で3年目になります。今年はオープニングステージを任せていただけるようになり、企画から携わり、話し合い・練習を重ね、当日は地域の方々にとっても喜んでいただき、中学生も大きな達成感を感じることができた様子でした。

最後の活動は、夏休みのラジオ体操です。

ラジオ体操の担当者が急遽お休みになり、中学生に応援依頼があったことから、急遽、ボランティアを行うことになりました。

参加した中学生から、「挨拶が少ない」、「せっかく集まってもよそよそしい」と課題が出され、一緒に解決策を話し合う中で中学生から深堀中学校で行っている挨拶運動を行ってみたいと提案があり、自分たちで参加者へ呼びかけるところから始めました。実際の呼びかけの様子の動画をご覧ください。と思います。

最初に、真ん中にいる髪の長い女子生徒が、参加している方々にこのように挨拶していきましよう、と説明しています。お手本を見せまうとって挨拶をして、明日からこのように挨拶をよろしく願います、と呼びかけをしました。そうすると、最初は、ほぼ皆さん挨拶がない状況でしたが、次の動画のような変化がありました。

変化後の動画をご覧ください。このように、大人も子どもも挨拶してくれるような雰囲気になりました。

スライドに戻ります。以上のように、地域の担い手としての活動は、地域を支える立場として関わることで、当事者意識が高まり、地域への帰属意識や郷土愛を強めることに大きくつながると考えます。

また、地域側にも若者の視点が入り、地域活動が活性化され、町会は高齢者中心のものというイメージが変わり、参加者層が広がるなど、町会の課題解決にもつながっていると感じ

ています。

次のスライドですが、さらに先を見据え、次のステップにつなげる活動に取り組んでおりますので、2つご紹介させていただきます。

1つめは、自分たちの活動を全市へ発信する機会をもち、学校以外の方からも評価をいただける経験につなげている活動です。これは、自分たちの活動に価値があると気づき、自信や自尊感情の高まり、視野の広がりにつながるものと考えます。

参加者から直接、質問やお褒めの言葉も多くいただき、地域にとっては子どもの社会参加が可視化され、多世代協働の後押しの効果もあったと感じております。

2つめは、卒業後も地域活動を継続したい生徒について、「深中OB会」を立ち上げ、ステップアップした活動への参加につなげているものです。

このスライドは、大人と一緒に函館の未来について意見交換を行い、全体発表をしている様子です。発表者が深堀中学校OBの生徒です。

次のスライドは、湯浜町会在宅福祉委員会交流会での高齢者の調理実習の補助として参加している様子です。

中学生のときとは異なり、より高度で専門性のある役割を担う地域活動を経験することで、ボランティアが単なる奉仕ではなく、社会課題とつながる経験ができるキャリア形成に直結するものと考えています。

このように学校と中学生のボランティア活動を通し、関わる全員がメリットを感じ、それぞれに郷土愛が生まれる効果的な活動になっていると感じています。

ただ、このような活動を展開できるのは簡単なことではなく、町会側に多世代を受け入れる理解をいただき始めていること、また学校側の細やかな配慮や工夫があるということがとても大きいと感じています。

自分が必要とされ、役に立つ人間だと感じる機会があるということは、自己肯定感、自己有用感につながるだけでなく、自分の馴染みの人ができ、場所ができ、活動がある。これは自分の居場所ができるということであり、これこそ地域への愛着の高まりにつながると感じています。

世代を問わず、地域への愛着を感じる人が増えることは、地域が豊かになることにつながります。たとえ、進学や就職で函館を離れても、地域への愛着や誇りは、函館に帰ってくる理由になり、地域に関わり続ける力を生むと考えます。

今後も、函館への愛着や誇りをもつ人が増えるよう、効果的に活動を継続していきたいと思えます。

以上です。ありがとうございました。

■大泉市長

市教委の取組と学校の取組について、説明がありました。

まず、ただいまの説明でご質問やご感想があれば、お伺いしたいと思います。

■藤井教育長

「函館郷土の歴史人物読本」について、少し補足いたします。

中島小学校の発表にも、中島三郎の助を勉強しているとありましたが、本市では小学生用の社会科副読本はございますが、子どもたちが函館の歴史を学ぶ機会が限られていることから、このたび他都市の中学生版の歴史副読本などを参考しながら、中学生が楽しく読みながら函館の歴史を学ぶことができるような副読本「函館郷土の歴史人物読本」を作成することとしたところです。

函館にゆかりのある人物約300名の中から、函館大火や港まつりなどの様々なカテゴリーを作り、バランスよく30名を人選し、現在執筆作業中でございます。

副読本が完成しましたら、朝学習の時間等に1人1台端末を活用して、デジタルで提供したいと思っています。それにより、函館への愛着や誇りを深めていただきたいと思います。

私からは以上です。

■大泉市長

ありがとうございます。

ただいま教育長から「函館郷土の歴史人物読本」につきまして、補足説明もありましたが、そのことも含めてご質問や感想があれば、お伺いしたいと思います。

■小葉松委員

少し主旨から外れますが、私は個人的には博物館が大好きで、道内の色々な博物館を巡っています。今、お話がありました歴史教育における博物館の関わり方について、例えば、道内で例をあげると、釧路市博物館に行くと、非常に展示が系統立てられて、展示そのものが子どもたちが来ることを前提にして行われていると感じます。釧路市では、夏休みとか学校の長期休業中は、釧路市内の小・中学生の入館料が無料というシステムになっています。

私は函館博物館が大好きですが、子ども目線での展示ではないなと感じます。

せっかくの資源ですので、もう少し、一朝一夕では難しいのかもしれませんが、最初に企画をする際に、子どもたちにどう伝えるかという視点で、子どもたちが学校がお休みになったら、博物館に行ってみようという気持ちになるような展示を考えていただけたら嬉しいなと、今のお話を聞きながら思いましたので、述べさせていただきました。

■大泉市長

ありがとうございます。他に感想やご質問などありますか。

■木村委員

3校の発表の方々、心が温かくなる発表でした。本当にありがとうございました。

郷土愛を育むということは、義務教育のまさに義務であると私も考えておりました。

子どもたちに、ふるさとのよさをとことん学ばせるというのは、非常に大事なことです。一方で、やはり課題についてももしっかり追究させることで、深い郷土愛に昇華されていくと私は思っております。そのような思いの中で、事例発表においてよさと課題というのがありましたので、本当にいい取組をしていると思えました。ありがとうございました。

■大泉市長

ありがとうございます。他にございますか。井口委員、お願いいたします。

■井口委員

発表を聞かせていただいて、ありがとうございました。

中島小学校さんは、1年生から6年生までの成長の段階を通しての学びということで、1年生は、中島廉売にまずは遊びに行くというところ、とてもいいなと思って聞いておりました。また、6年生は少し高度になって歴史上の人物を学ぶという、成長に合わせた学びをされていて、改めてすごいなと思えました。

桔梗中学校さんは、職場体験の企業数が50社もあり、子どもたちは幸せだろうなと思えました。

私でもわからない、その土地に住んでいてもわからない企業がたくさんあると思うので、子どもたちが小・中学生のうちからそのような企業に触れて学ぶことができることは、とてもいい機会だと思えました。また、生徒さんのプレゼンテーション資料が上手で、自分でもそこまで上手に作れないなと思い、生徒さんにもプレゼンテーション資料が素晴らしいです、ということをお伝えいただければと思います。

あと、深堀中学校さんのボランティア活動、私も地域が一緒なので、お世話になっております。本当に町会さんから、中学校の生徒さんのボランティアがとても助かっているというお話を私も耳にしています。

それは、子どもたちの自信にも本当につながっていることだと思います。

また、地域と子どもたちの関わりがとても難しい時代になっていると思いますので、そこはやはり地域コーディネーターさんのお力なしでは、橋渡しが難しいと思いますので、本当に地域コーディネーターさんにご尽力いただきまして、いつもありがとうございます。

以上です。ありがとうございました。

■大泉市長

ありがとうございます。今の感想の中で、桔梗中学校の職場体験先の企業について、私でもわからない企業がたくさんありますというお話があったと思うんですが、そこに私はとても着目をしていました。

私もそうです。全部の企業を知っているわけでもないですし、子どもたちも多分、一生懸命受験勉強をして高校を卒業して大学に進学するとなると、それは東京や札幌や大阪、名古屋だったり、きっと色々な都市に行くんだと思うんですよ。

私の出身は江別ですが、函館の子どもたちは、函館に帰ろうかなという思う気持ちが江別や札幌の人たちに比べて、強いような気がするんです。何の根拠もないですが。

でも、だからこそ、きっと大学3年生の就職活動の時期に、地元に戻ろうか、それとも地元を離れたこの土地で就職しようか、と両方を考えると思うんです。

地元に戻ろうと考えたり、そういう気持ちがあっても、地元の企業を、自分に合う企業があるのかなのかという以前に、そもそも地元の企業を知らないんですよ、多分。

どんないい企業があったのか、どんないい職場があったのかを知らないから、地元に戻りたいという気持ちが半分あったとしても、地元に戻ろうというその選択肢を捨てるというよりむしろ選択肢として選びようがない。

自分でも気づかない心のどこかに地元に戻りたい気持ちがあっても、企業を知らないから地元に戻る選択肢としてあがらないと思うんです。

だから、小・中学校のうちにそうした地元の企業を知る機会があるといいな、という思いがあって、政策として「ふるさとの職場を知る教育の実施」ということを公約に書かせていただきました。

その思いに対して、今回、総合政策教育会議のテーマに取り上げていただき、またすばらしい掘り下げた事例発表や教育委員会からのご説明をいただいて、今日は感動してるところです。ありがとうございます。

他に感想、ご質問はありますか。ないようですので、次に意見交換に移りたいと思います。

今日は限られた時間でもありますので、意見をいただく内容につきましては、2点に絞ってご意見いただければと思います。

1点目が「函館への愛着や誇りを育むために必要な教育は何か」、2点目が「今後取り組むべきことは何か」、ということに絞りたいと思います。

それでは、ご意見いただけますでしょうか。

■國谷委員

今の事例発表と大泉市長のご意見も踏まえたうえで話しますが、1点目の「函館への愛着や誇りを育むために必要な教育について何が必要か」という点ですが、生き方学習ということで、桔梗中学校の校長先生から色々な企業で、生徒に職業体験をさせていただいてのご報告をいただきまして、大変すばらしい教育だと思っております。

中学生に求めるのは酷なのかもしれませんが、もっと学年が上がったときのことを踏まえ、一步踏み込んで、その企業が必要とするスキルや資格は何かという点を、難しいことではありますが、教育の現場から時期が早いうちに伝えていくことも必要なのかと思います。

そのことにより、この企業で働くためには、この資格やスキルがなければ働けないんだと具体的な目標ができて、大学進学等の際に、その資格やスキルが学べる大学等に行こう、といった考えをもってもらえるのではないかと思いますので、私見ですが、早い段階から必要な資格やスキルなどを、より具体的に伝えた方がよいのではないかと感じております。

以上です。

■大泉市長

ありがとうございます。

実際に職場体験学習の場で、そのような生徒たちからの質疑応答や企業側からの説明等はないのでしょうか。

■桔梗中学校池田校長

職場体験のときには、事前に質問を用意していき、回答をいただく場面もありましたが、資格やスキルの質問をした生徒がいたかどうかは定かではないです。

■大泉市長

そうですね。今のご意見をぜひ参考にさせていただき、やはり貴重な場ですし、多分そのような点に、興味や関心をもつ子どもたちはいるのではないかと思いますので、そういった場を活用していただければと思います。

他にいらっしゃいますでしょうか。

■木村委員

地元企業との関わりということで、職場体験学習の内容ですが、先程、市長や井口委員からもお話がありました、あまり地元の企業を知らないということは、実は教員にも当てはまるんです。

それで、おそらく今の3つ前の学習指導要領で、職場体験というものが位置付けされて、そのときはもう先生方がどこの企業に行けばいいのか、受け入れてくれる企業探しだけで時間を費やして、実際の職場体験の日を迎えるときには、先生方が疲れ切っていたということが記憶にあります。

そのときは、企業側の方もまだまだ理解が進んでなかったようで、「えっ、中学生の職場体験学習ですか。」という反応だったんですね。ところが今は違います。函館や他の地域もそうかもしれないですが、函館の色々な事務所、企業さんが積極的に「職場体験をどうぞどうぞ。」、といてくださっている。そういうところが、非常に函館のよさだと私は思っています。

それでも、やはり学校側が企業と生徒をマッチングさせてつなげるという、この苦労が今でもあります。私が以前に勤めていた学校では、地域コーディネーターさんが地域をよく知っており、全部つなげてくれたのでとても助かりました。

このことが、何のプラスアルファになるかということ、職場体験学習に取り組ませることだけではなくて、次に教員が学校として、職場体験学習の作戦を練ることができるということです。

つまり、せっかく職場体験に行ったのだから、企業側の方々に子どもたちが体験してよかったと実感してもらえるような、そういう声掛けをしてもらうようお願いしようかなど、質の高まりということもあるので、ぜひその取組を地域コーディネーターの方もいらっしゃいますので、連携しながら行うということと、やはり企業開拓というものがなかなか難しいので、そこは市の経済部の協力を得たり、市教委から働きかけを行うなど、協力をしていただける関係機関を増やしていくことも、学校にとってはとてもプラスになるのかなと感じていました。

以上です。

■大泉市長

ありがとうございます。

今日は、地域コーディネーターの京谷さんにお越しいただいており、多分、皆さん、事務局も含めて、学校ではこんな取組をされているのかと思われたのではないのでしょうか。

学校現場の小・中学校の皆さんがどれだけご尽力しても時間が限られており、リソースも限られている中で、もうひとつ手が届かないところに、地域コーディネーターの方々にはずいぶんご尽力をいただいていることに、改めてお礼申し上げたいと思います。

たくさん地域コーディネーターの方がご苦勞されていると思うのですが、今、木村委員からもお話がありましたように、多分、学校はかつては企業探しにご苦勞されていました

が、今は違うというところが、地域コーディネーターの皆さん、あるいは多機関が色々な協力をされているから、質も高まってくるんだと思うんですね。

おそらく、先ほど、國谷委員がおっしゃったように、もっと子どもたちがもう一歩進んでどのような資格やスキルがあればいいのかなと考えるような、そういう質の高まりみたいなものも、多機関、多様な人が集まって取組を進めていくと、もっとクオリティも上がってくるのではないかなと思っています。

地域コーディネーターをはじめ、学校運営協議会の働きというものが非常に大事であるということを、今日の会議でもまた感じる事ができたと思います。

ぜひ、参考にしていきたいと思います。他にご意見いかがでしょうか。

■小葉松委員

函館の旧市内は職場体験学習というと、どうしても三次産業が中心ですよね。

今の子どもたちの中には、やはり人とコミュニケーションをとるのがとても苦手な子どもたちが一定数いると思います。

あくまでも個人的意見ですが、そういう子どもたちに本当は農業とか、人と接するのが苦手でも、植物とか、場合によっては漁業とかも含め一次産業について、こういう職業もあるんだよ、とアピールできる場があまりないのかなと感じます。

それこそ小学校に入学して、トマトの栽培などの学習はありますが、職場体験学習という観点で一次産業に出向くとなると、距離的な問題もあるとは思いますが、ずっと私が思っているのは、ちょっと人と接するのが苦手な子どもたちって、植物を育てたりしたら、とてもいいお仕事をやる子どもたちがいっぱいいるんじゃないかなと思っているので、そういう取組がどこかから可能になれば、とても嬉しいなと思います。

■大泉市長

ありがとうございます。

■藤井教育長

今の小葉松委員のお話を伺って、私も2点お聞きしたいのですが、子どもたちが企業へ訪問する形の職場体験学習ではなく、企業の方や色々な職業の方、あるいは農業の方、漁業の方などが、子どもたちに自分がどういう仕事をしているか、話す機会があるのかお聞きしたい。もう一つは、今、小葉松委員の意見にもあった通り、農業学習のような一次産業の体験学習等を行っているか、お聞きしたい。

■中島小学校目黒校長

小学校におきましては、例えば1、2年生の間に、生活科という学習の中で野菜を育てる体験活動があります。

この活動では、子どもたちが野菜を育てていくのですが、なかなか上手に育てることができない、大きな実にならないといったときに、農業をされている方を実際に講師としてお招きし、「こんなふう育てると大きなトマトができるよ。」というように、お声掛けしていただくという活動を行っている学校が函館市内に複数あると聞いております。

また、海洋STEAM教育ですとか、函館どつく等への見学活動も、小学校で積極的に行っており、一次産業ですとか二次産業との関わりというものも、発達段階に応じて行っているところでもあります。

■桔梗中学校池田校長

桔梗中学校では、特に一次産業を取り上げてはいないですが、先程の小葉松委員のご意見が大変参考になりました。

コミュニケーションが苦手な生徒が取り組みやすい内容を、次年度探っていきたいなと思っています。

■深堀中学校京谷地域コーディネーター

私も体験先ですとか、地元企業のコーディネートというところで、橋渡しで参加させていただいております。

小葉松委員がおっしゃるようなところで、農業、漁業という点は地域柄もあり、ちょっと難しく、できていないのが現状です。工夫している部分としては、自衛隊や函館アリーナ、函館競馬場といった地域ならではの体験先だけではなく、スキルや資格取得につながるという視点で、病院や施設なども体験先としており、今後はどのような資格が必要で、どのような待遇でこんなメリットがあるんだよというところまで、体験先に少し掘り下げてお話をさせていただくようお伝えして、子どもたちがその仕事をやってみたいと感ずることができるような内容にさせていただくよう調整したいと思います。

ただ、産業という点については、もう少し広げていけたらというところでヒントをいただきました。ありがとうございました。

■大泉市長

貴重なご意見を小葉松委員からお聞かせいただきました。

やはり一次産業を大事にしないまちって、衰えていくんですよね。一次産業、例えば函館であれば、漁業が非常に割合は大きいんですけども、漁業にしろ、農業にしろ、それが若い人の憧れの職場になるような、将来的に必ずそうならないとだめなんですよね。

今、本当に漁業をやる方々、農業をやる方々の後継者がどんどん少なくなっており、何とかしなければならぬ大きな課題です。

そういう意味でも、一次産業ということは大事ですし、小葉松委員の視点は、多様な子どもたちの学びの場としても、一次産業をアピールできる場になるのではないかとこのことでしたので、大変重要なお指摘をいただいたなと思います。

ありがとうございます。他にいらっしゃいますか。

■井口委員

私は保護者からの立場として、保護者としては、子どもに函館にずっといてもらいたいという思いはありますが、子どもたちが学んだり、やりたいことを応援するのが親だと思えます。

私も函館で生まれ育って、函館には本当はいいところがたくさんあるのに、それが当たり前になっているんだろうと、今回の会議で改めて思わせていただきました。

函館には、移住された方々がたくさんいらっしゃると思います。朝の情報番組でも移住のコーナーがあり、そこで去年か一昨年、函館を取り上げており、そのときに私もたまたま拝見しておりました。函館の魅力をとても感じて、一家で移住するという方々もたくさんいるだろうと思いますので、移住された方々に函館の魅力やいいところを教えていただき、それを例えば、子どもたちのキャリア教育の場面でのディスカッションなどのときに、移住された方々からの声を伝えたり教えることで、自分たちは当たり前だと思っていたけど、あそこやここはとても魅力なんだなと気づくことができるなと思いました。

また、まちづくりの活動をされている方々に、実際どのように具体的なまちづくりに取り組んでいるのかなど、そういう方々から函館の魅力について教えていただくことも新しい発想なのかなと考えました。

一番大事なことは、やはり私たち函館に住んでる大人が、函館はこういう魅力がとてもあるんだよと私たちが誇りに思って、だから私たちはここ函館に住んでるんだよという、大人がまずは子どもたちに後ろ姿で感じてもらえるように生きていくことが大事なのかなと、今回改めて私も学ばせていただきました。ありがとうございます。

以上です。

■大泉市長

ありがとうございます。

函館から外に出て行くことを私の立場から否定するわけではなくて、私の若い頃は、世界に飛び出すなら東京から、みたいな感覚だったんです。私が高校生のときとかは、そんなイメージで固まってました。

ですが、そうではないと思うんです。地方からでも世界に挑戦できるとか、地方からでも

世界の扉は開くことができる、そんなふうにならないとだめだと思うんです。

そういう意味では、子どもたち全員を函館に囲い込む気もありませんし、やはり羽ばたいてもらえる、そういうことがとても大事だと思います。

また、移住された方々からの声やまちづくりグループのリアルなどを子どもたちに伝えるということは、とてもいいことだなと思いました。

ただ、教育委員会や学校現場でたくさんのごことに取り組むことは大変かと思しますので、これは市長部局の仕事ではないかと思いました。

教育委員会の事務局からも市長部局へ伝えてください。よろしくお願いします。

他に意見よろしいでしょうか。ないようなので、次の話題へ移ります。

最後になりますが、これまでのご意見やご説明も踏まえまして、難しい課題ですが、「一旦地元を離れてもやがて戻ってくる人材を育てるために、必要な教育は何か」ということについて、ご意見をいただきたいと思ひます。

■木村委員

今日の3校の事例発表の通し、函館の小・中学校で郷土愛を育む取組をととても熱心に行われている中で、その子が函館に残るのか、函館から離れた地域へ進むのか、いつか函館に戻ってくるのか、戻らないのかということは、学校も教育委員会も手をのばすようなそういう領域ではないことであるのは重々承知のうえ、結局は子どもの資質とか、本人の意向、家族の意向、そして、その他諸々の条件を踏まえて、選択するということですよ。

どの道を選択しても、その子どもの可能性が最大限に伸ばせるような、そんな土台を作るのが学校、あるいは地域の最大の使命なのかなと考えています。

親も先生も教育委員会も、どこへ手放してもしっかりと自立する力を育むために子どもを育てるといふ、そういう意味合いもあると思うんです。

いわば手放すために子どもを育てると話すお母さんがいましたが、本当に自分もそのことを、親として、教員として、実感していました。

本当に子育て教育とは、ちょっと切ない営みであると思ひます。先程の市長からの質問である、「一旦地元を離れてもやがて戻ってくる人材を育てるために、必要な教育」にどう取り組んでいくかということですが、とても難解ですよ。

私は義務教育の中で、子どもたちにこの地域に育ててもらったとか、この地域で育ててよかったと実感として味わうことができるような取組を、意図的に学校や教育委員会、あるいは市が行っていく必要があるだろうと思ひています。

今日、事例発表のあった中島小学校、深堀中学校の町会との関わり、桔梗中学校の地元企業との関わり、そして日常の人との関わりの中での取組そのものの目的の他に、プラスアルファが絶対必要になってくると思うんです。

例えば、事例発表にもありましたが、褒められたとか、役に立ったという思いとか、できなかったことができるようになった、わからないことがわかるようになったなど、そして何より、自分にとって、とても居心地の良かった時間であり、空間であり、そしてそれらを仲間や大人と共有できた、そういう思いをたくさん経験させることによって、具体的にここに残ろうかなとか、いつか戻ってきたいなという気持ちの芽生えが、少しずつその子の心の中に育っていくのかなと私は思ひています。

ですから、学校の他、地域の方々の声掛けとか、職場体験に行ったときの企業の方々の子どもたちへのアプローチの仕方が、さらに子どもたちのそういう函館への思いを強くするような声掛けをしてもらえればいいのかという、少し具体的に欠けますが、今日この会議で改めて思ひました。

以上です。

■大泉市長

ありがとうございます。その通りだなと思ひます。

■藤井教育長

ちょっと関係ないかもしれませんが、私が教員になったのが昭和45年です。バブル経済にどんどん突入していく頃です。

教員になって福島町に赴任しまして、年に1回、小・中学校を全校休みにして、町の教育研究集会を行っており、先生方は休みではなくて、1ヶ所に集まって研究をするんです。

その集会の開会式の冒頭で、教育長が話したことが今でも記憶にあります。

先生方は研究集会に集まって、どうしたら子どもたちが勉強するかという話をされていますが、全員に勉強されたら福島町の親たちが困りますという内容です。

それでうちには何人か子どもがいますが、一番勉強しなかった子が結局、地元で家業のお風呂屋さんを継いでいると。

だから、子どもたちが勉強することは大事ではありますが、適度にやってもらわないと困りますと話されて、参加した先生方が皆笑っていました。

それから、巡り巡って南茅部へ教頭で赴任したときも、その当時、南茅部の昆布がとても採れた時期でしたので、漁師さんの親たちからもあまり子どもに勉強させないよう、勉強させれば皆、函館へ出ていってしまうという話をされました。

それはそれで一理あったのかもしれませんが、やはり自分の子どもに家にいて欲しいという願いは、函館の親たちも持っていると思うんです。

私の長い教員生活の中で、実際に教員を辞めて地元に戻り親の後を継いだ方、東京で色々な仕事をしてきたけど、親が病気になって地元に戻って後を継いだ方、友達でようやく出版社に勤めたのに、地元に戻り親の営んでいた小さな本屋さんを継いだ方もいます。要は、親を助ける理由で地元に戻る、学校の教員でも早くに退職して、親の面倒を看るという方もいたんですよね。

だから、やはり親子の絆というものが、子ども時代とか家を出て地元を離れる前に培うような、そういうその愛情教育といいますか、保護者に対してもそういう教育を学校教育としても何かできるのではないかなと思いました。

■大泉市長

若干突飛な部分もありながら、形のわかるご意見をありがとうございました。他にいかがでしょうか。

私の立場からすると、帰ってくる人材を育てるために必要な教育ということですが、私は教育に直接携わるものではないので、教育についてまで思いが至らないですが、皆さんのお話に出ているように、地元に戻ってこなければいけないわけでもないし、地元に戻ってきてくれというような枠づけをすることはおかしいわけで、世界にでも、宇宙にでも、どこにでも羽ばたいてください、と思っています。

ただ、地元に戻ってきたいなと思う人が帰ってこれるような受け皿を作っておくこと、あるいは地元に戻ってきたいなと思う潜在的な思いをもっている子どもたちや、そういった子どもたちを育てられるような、そういう教育をしておくことが大切だと思うんです。

これからの時代、例えば東京に生まれて、ずっと東京にいて東京にしか関わりをもたないという人は少なくなると思うんです。暑いということも関係していることもありますが、必ず2地域居住とか、自分の住んでいる地域プラスどこかの地域、それは1つではないかもしれない。そういうところと移動したり人と触れ合う、必ずそういう人生を送る人がとても多くなると思うんです。

そのときに、例えば、東京の大学に行って、東京で就職した函館出身の子どもたちがどこかの地域と交わりや関わりをもちたいと思うときに、函館を選んで欲しいんです。

そういうまちに自然と選ばざるを得ないようなそういう取組を、私、市長部局としてはするべきだろうと思います。函館の魅力づくりもそうなのですがそれだけではなく、皆さんおっしゃっていただいたような先端的、先導的な取組などそういうものもあるんです。絆づくりにととても頑張っているまちなんだということを、大学生になってから気づくかもしれないですよ。そういう絆づくりをきちんと取り組んでおくことが大事だなと思っています。

1つの例として、地域包括支援センターさん。全国どこの市にもありますが、函館の地域包括支援センターさんは市内10ヶ所あって、とても上手に地域に浸透して、町会の方々、民生委員の方々など、関わっている方々と結びついてきたんです。

そういう函館市の地域包括支援センターが、絆づくりにとっても頑張ってくれているのをわかっていたので、高齢者の社会的孤立の解消のために、どこの機関にその業務を担っていたらどうか協議していたときに、函館市は令和4年に地域包括支援センターさんに福祉拠点という機能も担ってもらい、介護だけじゃなくて、生活困窮や子ども、障がいなどの課題にマルチな対応ができるように機能を拡充した衣替えをしました。現在も取組を進めていただいておりますが、実はとてもめずらしい取組です。

地域コーディネーターを担っていただいているうちの一人が京谷さんです。恐らく、京谷さんは福祉拠点の職員の方ではないと思いますが、地域包括支援センターが、地域とのつながり、介護だけではなくて地域とのつながりに一生懸命取り組まれているところがあると思います。

このような取組を多分知らないまま、きっと子どもたちは育つと思いますが、大きくなって地元を離れたら、函館は違っていたんだなとわかると思います。これは福祉拠点のことばかりではなくて、函館市が抱えている課題、例えば、社会的孤立をどう解消しようとか、市民がもっと健康になるためにはどうしたらいいのか、環境、あるいはゼロカーボンをどうしたらいいのかなど、地域には必ず色々な課題があると思いますが、そういうものの先進的な取組をするなど、子どもたちが大きくなったときに、この地域はこんなに頑張っていたんだ、と後でちゃんと思ってもらえるような、当たり前を取組をしっかりと続けていくことが、絶対に将来に響いてくるなど今日、色々なお話を聞いて思いました。

教育そのものから外れて答えになっていないかもしれませんが、頑張らなければならないと思いを新たにしました。

他に、何かご意見などありますでしょうか。

大変、様々なご意見をいただきまして、参考にさせていただきたいと思っておりますし、事務局の方からも、教育委員会の関係課や教育委員会以外のセクションとの共有をぜひお願いしたい、と思っております。

では、次の協議事項の(2) その他に移りたいと思っておりますが、何かございますか。

特にないようですので、進行を事務局にお返しいたします。ありがとうございました。

■上野学校教育部長

それでは、以上で本日の協議事項は、すべて終了いたしました。

これをもちまして、令和7年度函館市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。